渡部一郎による「無尽蔵版」刊行物への一考察
―沼津兵学校の語学教本を中心に―

浅　川　道　夫

Michio Asakawa. Analyses on the Publication of *Mujinzo-Ban* ―Language Textbooks by Ichiro Watanabe for *Numazu Heigakko*―. ***Studies in International Relations***. Vol.42, Consolidated Edition. February 2022. pp.35-46.

Numazu Heigakko was opened by the Tokugawa clan to educate future army officers in the Tokugawa domain after the clan's relocation from Edo to Shizuoka due to the Meiji Restoration. To Educate officer candidates *Numazu Heigakko* published many textbooks whose quality had equaled or surpassed that of textbooks issued by the *Heigakuryo* under the Meiji government. Especially many of *Numazu Heigakko*'s Language Textbooks, inheriting the history of the Tokugawa Shogunate's *Kaiseijo*, were of superior quality. Most of those textbooks were written by Ichiro Watanabe, who became a professor at Numazu Heigakko, and hence, known as *Mujinzo-Ban* from his nom de plume. This article analyzes some of the *Mujinzo-Ban* textbook in the context of the language teaching curriculum at *Numazu Heigakko*.

はじめに

沼津兵学校とは、明治維新に伴う徳川家の駿府移封により立藩された静岡藩が、陸軍士官養成のために開設した補充学校（将校や下士官を養成する学校）である。同校の歴史に関しては、回想記・人物伝・地方史などの視点から著された文献が多数存在するが[(1)]、主な先行研究としては、米山梅吉『幕末西洋文化と沼津兵学校』（三省堂、1934年）、大野虎雄『沼津兵学校と其人材』（私家版、1939年）、沼津市明治史料館編『沼津兵学校』（沼津市明治史料館、1986年）、樋口雄彦『沼津兵学校の研究』（吉川弘文館、2007年）、沼津市史編さん委員会編『沼津市史　通史編　近代』（沼津市、2007年）などがあげられる。沼津兵学校では、士官教育のための教材として「沼津版」と称する独自の教本を数多く出版しており、これが他藩の開設した補充学校と大きく異なる点であったといえる[(2)]。この沼津版教本は、維新政府の陸軍兵学寮刊行物と比較して、同等もしくはそれ以上の質的水準を有していた。

特に語学関係の教本は、旧幕府開成所の流れを引いて優れた内容を持つものが多く、それらの多くは沼津兵学校一等教授並となっていた渡部一郎（元開成所教授並・明治5年頃に「温」と改名）により出版されたものだった。渡部一郎によって出版された教本は、沼津兵学校刊行物の中で「無尽蔵版」というカテゴリーに位置づけられており、英学史の研究分野で取り上げられることが多かった[(3)]。この無尽蔵版は、渡部一郎が開成所在職中に江戸で刊行した教本の再刊と、沼津兵学校の教材として沼津で刊行したものに大別されるが、なかでもスタンホープ印刷機を使用したとされる活版印刷の教本、すなわち『英吉利会話篇』・『経済説略』・『英国史略』・『西洋蒙求』に対する注目度が高い。本稿では、こうした無尽蔵版の諸教本について、沼津兵学校における陸軍士官養成のための教育カリキュラムを踏まえつつ、その中の語学科目との関連に留意しながら考察したい。

1、沼津兵学校における教育科目と教本

駿府に移封された徳川家では、陸軍局に属する30歳未満の陸軍士官から暫定生徒を選抜し[(4)]、その中から「素読・手跡・算術・地理」の4科目に関する「第一試」に合格した者を「資業生」とする形で、明治2（1869）年1月に沼津兵学校を開校

した。ちなみに同校は、当初「徳川家兵学校」と称したが、明治2年8月の版籍奉還に伴う静岡藩制改革により、「沼津兵学校」とよばれるようになった[5]。なお沼津兵学校の「資業生」は1期～9期までが逐次入校しており、その総数は230名程であったといわれる[6]。

沼津兵学校における修学課程は、資業生（陸軍士官学校予科に相当）→本業生（陸士本科に相当）→得業生（見習士官に相当）とされていたが、同兵学校の存続期間が3年弱だったため、結果的に本業生に進級した生徒はいなかった。資業生の受講すべき学課は、「外国語学　英仏之内壱科」・「究理　天文　地理　歴史　大略」・「数学　書史講論　図画調馬　試銃砲　操練」とされ、『徳川家兵学校掟書』の中にはその細目が一覧表の形で掲げられている[7]。

このうち「書史講論」についてみると、「博物新編」に相当する教本は、合信（B. Hobson）が漢文で著わした『博物新編』（老皀館、1864年）だったと考えられる。ただし初級の科学教育という点から見ると、漢文からでは読み取れない語彙や知識が多いため、大森秀三が和訳した『博物新編訳解全4巻』（匏翠居蔵、1968－70年）を、補助教材として使用した可能性も考えられる。他方、「地理全誌」は慕維廉輯訳『地理全誌　上・下』（山城屋佐兵衛、1856－57年）、「瀛環志略」は徐継畬著『瀛環志略全10巻』（対嵋閣、1861年）、「綱鑑知易録」は呉乗権撰『綱鑑知易録　全92巻』（出雲寺文次郎、1851年）といった、漢籍の翻刻本を用いた地誌教育である。また、「皇朝史略」は青山延于著『皇朝史略　全12巻』（水戸蔵版、1826年）、「日本外史」は頼山陽著『日本外史　全22巻』（罫氏蔵版、1864年）という、幕末に著わされた国書にもとづく史学教育であった。なお「孫子」については、江戸時代を通じて多種類の解説書が刊行されているため、教本として使用されたものの書名を特定することができなかった。

沼津兵学校の中で最も重要な位置を占める軍事教育については、士官候補生である資業生にとって必要な、基礎的軍事技能（教練・小部隊指揮・体操・馬術など）の修得に重きを置いたものとなっていた。ただし資業生向けの戦術・戦略に関する学課は設けられておらず、『兵学程式』や『陸軍士官必携』が刊行されているものの、これらに関する講義が実施されていたのかどうかは明らかでない。学課細目の一覧には「銃砲打方」があり、その内容について「銃ノ組立的打等打交[8]」と説明しているが、実際に行われていた訓練に関しては、「蝋燭打と射的」と題する次のような回想がある[9]。

> 蝋燭打とは蝋燭を燃し其光焔に鉄砲の巣口を向け三四尺離れて鉄砲の引金を引き雷管を発し筒内より発する圧搾瓦斯を以て火焔を吹き消すが主眼にて覘ひを定むる稽古にて実弾射撃の準備なり
> 射的場は城東の湟の内に在り練兵場より壹丈も低し湟と蝋燭打稽古場の間に高く土堤を築き外れ弾丸遠く飛ふを防き土堤の下に別に垜を設け其前に紙製の五尺計りの的を樹て南方より之に向つて打つなり
> 角打稽古も毎日誰々と約二十人つつ順番にて出て其内より一人的見番を定め代り合ひて順々に実弾射撃の稽古を為すなり射撃も立射、膝台、伏射等数種に亘り漸次夫々稽古せしなり

ここにいう「蝋燭打」は、火門突に雷帽を被せる外火式の前装銃を用いた照準訓練であり、沼津兵学校では前装施条式のミニエ―銃が使われていたことをうかがわせる。さらに「実地に鉛を鎔解して型を持て銘々弾丸を鋳る[10]」という鋳丸稽古の回想から、「火工方」柏原淳平の下で弾薬包製造などの実習もおこなわれたことが知られる。

また、「操練」については「生兵小隊幷ニ大砲ハセキチー運転位マデ[11]」とあり、沼津版『歩兵程式』の内容も生兵（未教練兵）と小隊の教練であることから[12]、資業生に対して各個教練から初級の部隊指揮に至る歩兵の訓練が施されていたことがわかる。これについても「士官稽古」として、「始めは兵士となりて小隊運動の稽古をなし次に中隊運動を夫以上は生徒人数不足ゆゑ行ふ能はず次に生徒中の者選ばれて伍長となり或は中隊長となり教官の指揮の下に夫々の稽古をなしたり[13]」との回想が残されている。なお上掲文書にみえる「セキチー（sectie）」とは、6門の砲を以て編制され

る砲兵の「小隊」を指すが、その訓練がどのような内容だったのかを伝える史料は残されていない。

他方、沼津兵学校では「体操方」として羽山蝝（勝四郎）・本多忠直（幸七郎）・山口知直（朴郎）・笠島重助・下逸郎、「体操教師」として佐野運籌を任命し[14]、フランス式の体操を教えていた。軍用の体操教本としては、旧幕府陸軍のフランス伝習を踏まえて翻訳・刊行された『新兵体術教練』があり[15]、「体制及頭首の運動・臂の運動・脚を曲げる法及歩法・体を傾る法・高飛び・棹飛び・馬上飛び」など、同書の内容に沿った実技演習がおこなわれたものと思われる。教官の人数からみて、積極的に体操を取り入れていた様子がうかがわれ、元資業生の回想によればその実施状況は次のようなものだった[16]。

> 始めは木馬手摺などより竹飛び棚飛など種々あり柵飛ひは図中練字の右方線を以て画せる所の湟に設けられたり棚飛芸の内、棚の上に仰向に臥し首を棚の外に出し足より上げて体を棚下に落すは馴るれば容易なるも神経質の人は好まぬ伎なりし此外に首振りを始め手足の運動、駈足等種々あり

そのほか「喇叭方教授」に鈴木高信（与三郎）・佐野照房（左金吾）・梅沢有久（伝吉）、「喇叭方出役」に戸張胤邦（重太郎）が任命され[17]、フランス式の軍用喇叭を用いた指揮信号の吹奏法が教授されていた。教本となる喇叭符については、旧幕府のフランス伝習以来用いられてきた『喇叭符号』があり、その内容は「一般ノ号音」21曲・「運動ノ合図」24曲・「三音整備」3曲・「二十六隊各個ノ号音」20曲・「各個小隊ノ号音」10曲からなるものだった[18]。

これらの指揮信号は、前装施条銃段階における軽歩兵の教練に対応するものだったが、来たる後装銃段階の散開戦法に接続する役割を併せ持っていた。

明治3（1870）年の兵式統一布告に伴って「砲兵歩兵編制式[19]」が通達されると、諸藩常備兵は歩兵一大隊につき「喇叭手三十名（内伍長三名）」を配置するものと定められた。現石高21万2千石の静岡藩では、1260名余の「修行兵（在地の常備兵）」から成る2大隊余の兵力を有する計算となり、60名程度の喇叭手が必要となる。ここにおいて「喇叭方」の教官達には、資業生に喇叭の吹奏法を教育することにより、彼らを通じて修行兵の喇叭手を育成するという、静岡藩の要請に応ずる任務が課せられることになった。

軍事教育のために刊行された沼津版の教本としては、前出『歩兵程式』のほか『野戦要務』をあげることができる。このうち『歩兵程式』（沼津学校、1870年）は、1863年版フランス軽歩兵教練書 *Reglement du 17 juin 1863 sur lexercice les manoeuvres de L'Infanterie* を大鳥圭介が翻訳したもので、幕府の陸軍所が刊行した『官版　歩兵程式』（陸軍所、1866年）の再刊である。どちらも「操練之部　巻之一・二」しか刊行されていないが、沼津兵学校では資業生の「操練」が生兵～小隊教練までだったことから、特に問題はなかったのであろう。また『野戦要務』（沼津学校、1869年）は、1856年版のオランダ野外要務書 *Handleiding tot de kennis van de velddienst* を大鳥圭介が翻訳し、陸軍所が『官版野戦要務』（陸軍所、1865年）の題名で刊行したものの再刊である[20]。資業生が野外演習を行う際の教材として、使用されたと思われる。これら2点の教本は現存するものが極めて少なく、資業生が個々に所持して使ったものとは思われない。もともと刊行部数そのものが僅少で、頒布された範囲も沼津兵学校の教官に限定されていたのではなかろうか。

数学については、「点窮（開平 開立マデ、二次方程式マデ、連数対数の理）」と「幾何（平面式、八線正斜三角、立体）」のほか「実地測量」など詳しい細目が示されているが[21]、沼津版として刊行された教本は、塚本明毅撰『筆算訓蒙　巻一』（沼津学校、1869年）のみである。同書の編纂にあたっては、アメリカで刊行されたC. Davies, *University Arithmetic* の内容が取り入れられたといわれ[22]、「算用数字・西洋式の記号を用い、整数の加減乗除、分数・小数の加減乗除、比例式の諸計算[23]」などが収載されている。ちなみに巻二以下の続巻と答式は、廃藩後に東京で刊行され[24]、明治期における洋算の入門書として好評価を得た。

教育史研究の視点からは、沼津兵学校において高い水準の語学教育がおこなわれていたことが、早くから指摘されている。なかでも英語教育については、一等教授並であった渡部一郎の手になる各種の教本が用いられ、維新当時としては一頭地を抜く存在だったといえる。既出の学課一覧に示された語学の細目と、沼津兵学校や渡部一郎らによって刊行された諸教本との対応関係を考えると、次のようになる。

会話：『英吉利会話篇』、『英蘭会話訳語』、『英仏単語篇注解』、『英吉利単語篇』、『法朗西単語篇』
文典：『英吉利小文典』
万国地理概略：『地理初歩』
窮理天文概略：『理学初歩』
万国史概略：『西洋蒙求』、『英国史略』
経済説大略：『経済説略』

このうち沼津において刊行されたのは、『英吉利会話篇』・『法朗西単語篇』・『西洋蒙求』・『英国史略』・『経済説略』の5点で、『法朗西単語篇』以外は渡部一郎が刊行した無尽蔵版である。また『英蘭会話篇』・『英吉利小文典』は明治新刻の無尽蔵版、『英仏単語篇注解』・『地理初歩』は慶応年間の既刊本を明治に再刊した無尽蔵版であるが、何れも沼津で刊行されたものかどうかは確定できない。他方、『英吉利単語篇』には慶応二年刊行の開成所版と、それを蔵田屋清右衛門が明治3年に再刊した静岡藩版があり[25]、『理学初歩』についても開成所版を明治2年に「津田仙弥」名義で再刊したものがある[26]。次章では、上記の諸教本のうち渡部一郎が刊行した無尽蔵版について、詳しく検討していきたい。

2、「無尽蔵版」の諸教本について

渡部一郎は天保8（1837）年の生まれで、安政3（1856）年に下田表御役所書物御用見習となり、蘭学を学んだ。次いで安政6（1858）年、神奈川表御役所書物御用見習となってから英学を学ぶようになり[27]、文久2（1862）年に蕃書調所英学句読教授出役を命ぜられ、元治元（1864）年には英学教授手伝出役に進んだ。渡部一郎自身による洋書の翻刻や翻訳は、この蕃書調所時代から開始され、慶応2（1866）年には翻刻『地学初歩』の刊行をみた。さらに慶応3（1867）年には、英学教授職並出役に昇進するとともに開成所調役を兼務し、『英仏単語篇注解』・『陸軍士官必携』といった翻訳本のほか、翻刻『英吉利会話篇』・『西洋蒙求』を刊行した。

明治維新を経て、慶応4（1868）年5月に徳川家の駿河移封が決まると、渡部一郎もこれに随行して駿府に移り、同年8月に明新館付属となった[28]。このころ徳川家では、士官養成のための兵学校を設立する準備を進めており、渡部一郎は明治元（1868）年11月、一等教授並兼改役に任命された。この時期に渡部一郎が刊行したものとしては、既刊『英吉利会話篇』を翻訳した『英蘭会話訳語』と、翻刻『英吉利小文典』がある。

徳川家では、明治元年12月に『徳川家兵学校兵学校掟書』を公布し、翌明治2年1月に同兵学校を開校した。一等教授並として資業生の教育にあたった渡部一郎は、「英語を担当し毎日ウエブスターの大辞書を小脇に抱へて登校した[29]」とのエピソードがある一方、兵学校で使用する英語教材の作成に取り組み、『英吉利会話篇　第二版・第三版』・『経済説略』・『英国史略』・『西洋蒙求　第二版』の翻刻をおこなった。これら鉛製活字で印刷された教本は、「旧幕府にオランダ国王が献上したスタンホープ印刷機が沼津に運ばれ、それで印刷された[30]」ものといわれる。

ちなみに慶応3年に江戸で刊行された『英吉利会話篇』と『西洋蒙求』も、鉛製活字を用いた活版印刷の翻刻本である。その際使用された印刷機の由来については、「嘉永二年、幕府は和蘭政府よりスタンホープ式手引印刷機一台及び和蘭製活字大小百余種の寄贈を受けたり、是れ西洋活字印刷機械の我国人の手に入り始なりき。幕府は之を蕃書調所（後洋書調所となり、尋で開成所と改称す）に供へ、欧洲諸国語の教科書の翻刻に使用せしめたり[31]」との記事がある。「開成所は幕末の混乱裡に閉鎖され、印刷設備の大部分は徳川家の沼津印刷工場に移された[32]」といわれ、沼津での再

刊にあたっても、これらの印刷機が使われたものと思われる。

そのほか渡部一郎は、慶応年間に刊行した『地学初歩』・『英仏単語篇注解』などの諸教本を、明治2～3年に再刊している。当初これらの教本について、沼津兵学校では既刊分を江戸から運び込んで使用していたと思われるが、語学用ゆえ手擦れや書き込み等による消耗が早く、次々に入校する資業生への供給という問題も相まって、再刊の必要が生じたのであろう。また慶応2年に江戸で刊行された『陸軍士官必携』について、沼津兵学校での授業には使われなかったにもかかわらず、明治2年に再刊している。同書は戦略理論に関する書籍だったことから、国内的に少なからざる需要があったものと思われる。

そもそも無尽蔵版という称呼は、渡部一郎の書斎名であった「無尽蔵」に由来するもので、渡部自身が「版権を持っていて、出版による利益はその後の活動の資となった[33]」とされる。この無尽蔵版は、幕末の慶応2～3年に刊行されたものと、維新後の明治元年～4年に刊行されたものに大別できる。本稿で取り上げるのは後者のカテゴリーに属する下記9種類の教本だが、これには沼津で印刷されたもの〈3～6〉と、江戸ないし東京で印刷されたと思われるもの〈1～2〉・〈7～9〉がある。

〈1〉『英蘭会話訳語』明治元年刊

深緑色の表紙に「JAPANESE CONVERSATION /英蘭会話訳語」という横書きの題簽を貼った、縦123㎜×横178㎜の和装本である。見返しには「ガラタマ先生口授/英蘭会話訳語/明治元年初秋　渡部氏蔵梓」との刊記があって「無尽蔵印」が朱印で押されており、序1丁・附言1丁と本文42丁は整版印刷となっている。同書は、慶応3年に江戸で刊行された『英吉利会話篇』を翻訳したものであり、出版に至る経緯が次のように記されている[34]。

> 余曽て蘭人ファンデルペールの著せる英吉利会話篇を刷行す、然るに学兄川本内田の二子之を開成学館の教師ガラタマ先生に従て読み直に我邦俗間の通語に訳出し以て之を余に贈れり、余近日纔に閑あるによりて之を看るに惜哉其稿未た全からず侭錯乱の処あり、然るに二子既に遠く別れて其不足を求る事易からす、因て今之を自から補刻校定して曽て倫頓に留学せし友人外山子に訂し、以て貿易市場彼我日用の便に備ふと云

ここにいう「ガラタマ先生」とは、幕府が理化学専門の教師として招聘したオランダ陸軍の軍医ハラタマ（K.W.Gratama）である。「川本内田」とあるのは、開成所の一等教授だった川本清次郎と内田弥太郎であり、慶応三年に江戸の開成所へ赴任して来たハラタマから、翻刻『英吉利会話篇』の読解に関する指導を受けたのであろう。また「余近日纔に閑あるによりて」との記述からみて、『英蘭会話訳語』の原稿は、王政復古から徳川家処分に至る、慶応4年1月～5月頃に作成されたものと考えられる。

刊行された時期については、見返しにある「初秋」が旧暦の7月に相当することから、渡辺一郎が駿河に移った前後ということになる。この頃、沼津にはまだ兵学校が開設されておらず、駿府でも出版がおこなえる体制は整っていなかったと思われるので、同書は江戸において刊行されたものとみるのが自然であろう。

〈2〉『英吉利小文典』刊年不記（明治元年もしくは3～4年刊）

浅葱色の表紙に「モルレイ氏著　英吉利小文典」という題簽を貼った、縦171㎜×横124㎜の和装本で、上下二冊からなる。見返しには「ABRIDGMENT of MURRAY'S ENGLISH GRAMMER /モルレイ氏著/英吉利小文典/渡部氏蔵板」との刊記があり、上下巻それぞれの巻末に「無尽蔵之印」が朱印で押されている。本文は、英文法に関する筆記体の英文を整版印刷したもので、上巻は1～30丁・下巻は31丁～49丁という形で分冊されている。

原書はLindley Murray, *Grammar of English Language*（New York : Collins & Co., 1818）と思われるが、同書は1795年に初版が刊行されて以来、米英各地で重版されているため、正確にどの版をテキストにしているのかは特定できなかった。

翻刻されたのは、同書のPart Ⅰ～Ⅳであり、上巻にはOrthographyとEtymology、下巻にはSyntaxとAppendixの部分が収載されている。

刊記がないので、刊行された時期や場所を直接的に知ることは出来ないが、「渡辺温の翻刻書が明治二年以後は総て沼津にて刊行せられ鉛製の活字を以て印刷されてあるが明治二年以前のものは総て木版刷りになつてゐる[35]」ということから、同書は明治元年頃の江戸での刊行物と推定されている。ただし、明治4年版の大史局編『新刻書目一覧』に『英吉利小文典』が収載されていることから[36]、明治3～4年に官許を得て刊行されたものとも考えられる。

〈3〉『英吉利会話篇　第二版・第三版』明治2・4年刊

深緑色の表紙に「英吉利会話篇」という題簽を貼った、縦170㎜×横122㎜の和装本である。見返しには「ENGLISH CONVERSATION / ガラタマ先生閲/英吉利会話/江戸渡辺氏刷行」との刊記が刷られており、「梧堂」の朱印が押されている。第二版の扉には「SECOND EDITION/NUMADZ/WATANABE & CO./SECOND YEAR OF MEIJI」の刊記があり、全体的な体裁は慶応三年に江戸で刊行された第一版と同様である[37]。本文は鉛製活字を用いた活版印刷で、袋綴となった各頁の上部中央には、1～50までの頁番号が打たれている。

原書はR.van.der.Pyl, *Gemeenzame Leerwijs*（Dorderecht : Blusse en van Braam, 1822）という蘭書で、その中から英文の会話部分のみを翻刻している[38]。見返しに「ガラタマ先生閲」とあるところから、渡辺一郎は同書を編集するにあたって、前記したオランダ人ハラタマから、開成所において助言を得たことがうかがわれる。この『英吉利会話篇』は、沼津兵学校の開校にあたり、初級英会話の教本として有用であると判断されたため、いち早く再刊が図られたのであろう。英会話を学ぶ資業生たちは、前記『英蘭会話訳語』と同書をセットにして使用したものと思われる。

さらに『英吉利会話篇』は、明治4（1874）年にも第三版が刊行されている。第三版の体裁は、表紙・法量・見返しについては第二版と同じだが、扉に英文で記された内題と刊記が枠線で囲まれ、本文の各頁にも新たに枠線が付け加えられている。扉の刊記をみると、「THERD EDITION/NUMADZ/WATANABE & Co./FOURTH YEAR OF MEIJI」となっており、本文の各頁には1～50までの頁数のほかに、1～25丁までの丁数が付記されている。頁ごとの内容は第二版と同じだが、枠線を加えたことも含め、活版を組み替えているようにもみえる。

〈4〉『経済説略』明治2年刊

浅黄色の表紙に「経済説略」という題簽を貼った、縦190㎜×横128㎜の和装本である。見返しには「明治二巳年刷行/経済説略/駿州　無尽蔵」とあって、「無尽蔵版」の朱印が押されている。扉には「THE COMPENDIUM OF POLITICAL ECONOMY ; FROM THE LESSON BOOK」という内題と、「EDITED BY WATANABE & CO. /AT NUMADS. / MAIGE 2ND.」という刊記が活版印刷されている。本文は鉛製活字による活版印刷で、和本仕立て袋綴となった各頁には、1～67までの頁番号が打たれている。

原書はRichard Whately, *Easy Lessons on Money Matters*（London : John W. Parker and son, 1849）であるが、「第十二課はアダム・スミスの国富論の第一篇第一章の分業論Of the Division of Labourの抜粋[39]」とされている。沼津兵学校においてこの『経済説略』は、「経済説大略」という学課の教材として用いられたが、当時の時代背景を考えると、陸軍士官を目指す資業生にとって、同書はやや難解な内容だったと思われる。

なお、「駿府無尽蔵書屋蔵版目録[40]」には、『経済説略』の訳本として「富国経済学大成　日本渡部一郎訳　近刻」の書名がみえる。しかし『経済説略』は、慶応義塾の小幡篤四郎が翻訳し、『生産道案内』という題名で明治3年に刊行されたため、渡部の訳本は未刊に終わったと思われる。同書の「凡例」には、「此書は友人渡辺一郎が翻刻せる経済説略といふ美国開版の原書を訳するものにて文意簡短なれと経済の一端を窺ふへきものなり[41]」と記されている。

〈5〉『英国史略』明治3年刊

浅黄色の表紙に「英国史略」という題簽を貼っ

た、縦215㎜×横132㎜の和装本で、乾坤二冊よりなる。見返しには「明治三庚午官許/英国史略/渡部氏蔵版」とあって、「梧堂」の朱印が押されている。扉には「NEW READING SERIES. ENGLISH HISTORY.」の内題と共に、「LONDON : PRINTED BY W. CLOWES AND SONS.」と「NUMADS/REPRINTED BY W. N. & CO. / 1870」という、原書と沼津版の刊記が活版印刷で併記されている。本文は鉛製活字による活版印刷で、和本仕立て袋綴となった各頁には、乾巻には1～172・坤巻には173～344の頁番号が打たれている。原書の編者については「Society for Promoting Christion Knowledge（基督教知識普及会）」とあり、1861年に刊行されたものといわれる[42]。

同書には、渡部一郎が維新政府に出版許可を申請した際の書類が現存している。それは次のようなものだが[43]、扉に「明治三庚午官許」と記されているにもかかわらず、出版が許可されたのは明治四年二月であり、このような時間的差異が生じた理由ついては不明である。

覚

一英国史略　　半紙中本乾坤二冊

但辛未三月迄出版

右ハ英吉利国歴代之事ヲ記載仕候書ニテ、一切御条例ニ背キ候箇条更ニ無之候間、私蔵板ニ仕、出板仕度奉願候、若シ発兌之上御尋之儀ハ私引受可申奉存候、依之活字稿本相添、此段奉願候以上

静岡藩

沼津学問所

教授方

辛未二月　　出板願人　　渡部一郎

開板之儀、聞届候、刻成之上三部上納可致事

〈6〉『西洋蒙求　第二版』明治４年刊

深緑色の表紙に「A BOOK OF LESSSONS. / ANECDOTE. / 西洋蒙求」という横書きの題簽が貼られた、縦182㎜×横123㎜の和装本である。見返しには「明治三庚午改官許/西洋蒙求/無尽蔵々板」とあって、「梧堂」の朱印が押されている。扉には「A BOOK OF LESSONS FOR THE USE OF SCHOOLS.」という内題があり、「PUBLISHED BY PERMISSION OF THE SCHOOL KAISEIJO.」との開成所による出版許可（初版刊行時のものと思われる）と共に、沼津版の刊記「SECOND EDITION / NUMADZ / ITIRO W. N. & CO. / MEIJI 4TH」が活版印刷されている。本文は鉛製活字による活版印刷で、和本仕立て袋綴となった各頁に、42頁までの頁番号が打たれている。

原書は不明[44]とされるが、西欧の歴史と人物に関する逸話をいくつかの洋書から抜き出し、渡部一郎が英語読本として編集し直したものかもしれない。ともあれ沼津版の『西洋蒙求』は、「改官許」とか「SECOND EDITION」といった記載が認められることから考えて、沼津兵学校の「万国史大略」用テキストとして、江戸版を再刊したものであることに間違いなかろう。

〈7〉『地学初歩』刊年不記（明治３～４年に再刊）

浅葱色の表紙に「CORNELL'S PRIMERY GEOGRAPHY. REVISED.」という横書きの題簽が貼られた、縦181㎜×横123㎜の和装本である。見返しには「CORNELL'S PRIMERY GEOGRAPHY. REVISED. /コル子ル氏著/地学初歩/渡部氏蔵版」とあって、「梧堂」の朱印が押されている。扉には「CORNELL'S PRIMERY GEOGRAPHY, FOR THE USE OF SCHOOLS」の内題と、「FIRST EDITION / YEDO」という刊記が活版印刷されている。ただし、巻末に「無尽蔵々板目録　東京書肆　山城屋佐兵衛/窪田清右衛門」が付されていることから、明治期の刊行物であることがわかる。本文は木活字を用いて印刷されているようであり、35丁からなる。再刊本の各頁には、初版本にはなかった枠線が付加されている。

原書はS. S. Cornell, *Primary Geography*（New York : D. Appleton & Co., 1859）であり、翻刻の初版は慶応2年に江戸で刊行されたものである[45]。再刊された時期は、大史局編『新刻書目一覧』に収載されていることからみて[46]、明治3～4年と考えられる。沼津兵学校では「万国地理概略」のテキストとして用いられた。

〈8〉『英仏単語篇注解』刊年不記（明治3～4年に再刊）

花浅葱色の表紙に「英仏単語篇注解」という題箋を貼った、縦113㎜×横158㎜の和装本で、見返しには「英仏単語篇注解/慶応三年刻/開物社」、巻末には「慶応三年丁卯五月/開成所校本」とある。同書は、慶応2年に刊行された『英吉利単語篇』(開成所、1866年）収載の単語1490点を和訳したものであり、整版印刷の凡例1丁と本文36丁からなる。大史局編『新刻書目一覧』に収載されていることから、明治3～4年に再刊されたものと考えられる[47]。再刊本は、開成所版の版木をそのまま使って印刷されているが、表紙の色と地質が明治2年に刊行された前出『筆算訓蒙』と同一であることから、初版と区別できる。

〈9〉『陸軍士官必携』刊年不記（明治2年再刊）

薄柿色の絹張り表紙に「陸軍士官必携」という題箋を貼った、縦183㎜×横125㎜の和装本である。見返しには「慶応三年丁卯上梓/英国流底南格羅拿覓陡高盧撰/一千八百六十二年倫敦府刊行/陸軍士官必携/渡部一郎訳・柳河春三閲」とあって、「無尽蔵之印」の朱印が押されている。巻末に「慶応三年丁卯十月/江戸書林　日本橋通二丁目山城屋佐兵衛」の刊記があるが、「駿府無尽蔵書屋蔵板目録」が収載されていることから、明治期の刊行物であることがわかる。もともと『陸軍士官必携』は、慶応3年7月に第一巻の出版届が出されたのち[48]、明治元年7月に第十巻の刊行を以て完結するまで、各巻ごとに逐次刊行され、10巻10冊の構成となっていた。

陸軍奉行並組重三郎倅
開成所教授職並出役
渡部一郎訳
士官必携

右書籍者、書面一郎兼て研窮翻訳仕候、此度初巻一冊出来候に付き、献納仕度御願出候。右は当節御見合にも相成候書ニ付、願之通献納被　仰付候様仕度、尤後巻之儀も上木出来次第追々献納為仕可申と奉存候。依之右初巻壱冊相添此段申上候。

卯七月
海軍奉行並　陸軍奉行並　開成所頭取

明治の再刊本は、慶応版と同じ版木を用いて薄葉紙に整版印刷され、10巻分を1冊に合本した形となっている。原書はP. L. Mac-Dougall, *The Theory of War*（London : Green, & Co., 1858）であり、内容的にはクリミア戦争の戦例を踏まえつつ、フランスの戦略思想家ジョミニ（A. H. Jomini）の理論を解説したものだった。明治3年の大学編『新刻書目一覧』に収載されていることから、『陸軍士官必携』の再刊は明治2年と考えられる[49]。沼津兵学校では、資業生向けに戦術・戦略関係の学課が設置されていなかったため、同書が教材として使われた形跡はない。しかし和歌山藩の兵学寮でテキストに用いられるなど[50]、戦略理論に関する書籍が僅少だった維新当時、相応の需要はあったものと思われる。

おわりに

以上、明治元年～4年にかけて刊行された渡部一郎の無尽蔵版についてみてきたが、そのうち沼津版に含められるのは『英吉利会話篇』・『経済説略』・『英国史略』・『西洋蒙求』の4種類であり、ほかは江戸もしくは東京で出版されたものと考えるのが妥当であろう。これら無尽蔵版の版権は渡部一郎個人のものであり、出版による利益がその教育・研究活動の資金となっていたことは前記の通りである。

そのほか、渡部一郎の蔵版目録に書名が掲載されているものの、現存を確認できないものがいくつかあり、それらは『富国経済学大成』・『英文童蒙訓話』・『英国史略訳本』・『仏文理学初歩』・『英文士官必携原本』といったものである。このうち『富国経済学大成』は、『経済説略』の訳本として出版を予定したものらしいが、小幡篤四郎訳『生産道案内』が刊行されたため未刊に終わったと考えられる。それ以外の教本については、未発見史料の探求を含め、後考を俟ちたい。

註

（1）　関係する文献については、「沼津兵学校関係文献一覧」（沼津市明治史料館編・刊『沼津兵学校』1986年）56～60頁を参照のこと。

（2）　明治元年以降、廃藩置県がおこなわれた明治4年までの期間に、士官養成のための補充学校を開設した藩として、松代藩（兵制士官学校）・新発田藩（兵学寮）・和歌山藩（兵学寮）・高知藩（士官学校）などをあげることができるが、松代藩を除き独自の教本を刊行するまでには至らなかった。

（3）　この分野での先行研究としては、以下のようなものがあげられる。

- 松崎実「通俗伊蘇普物語解題」（明治文化研究会編『明治文化全集　第15巻　翻訳文芸篇』日本評論社、1927年）。
- 石上東藁「明治初期の沼津版について」（『本道楽』第8巻第3号、1930年）。
- 荒木伊兵衛『日本英語学書志』（創元社、1931年）。
- 飯田宏「明治初期の沼津の英学」（『静岡女子短期大学　紀要』第4号、1957年）
- 片桐芳雄「幕末明治の洋学者・渡部温（一郎）覚え書（1）」（『愛知教育大学研究報告』32、1983年）。
- 戸塚武比古「渡部温略伝―初期一英学者の歩んだ道」（『英学史研究』第16号、1983年）。
- 樋口雄彦『沼津兵学校の研究』（吉川弘文館、2007年）。

（4）　大野虎雄『沼津兵学校と其人材』（私家版、1939年）9頁。
同書によれば、学校方による暫定生徒の選抜は明治元年10月に実施され、その人数は300余名に達したといわれる。

（5）　同上書、13頁。

（6）　沼津市明治史料館編『沼津兵学校』（沼津市明治史料館、1986年）9頁。

（7）　陸軍総括『徳川家兵学校掟書』（刊所不記、1868年）「学課之事」。

（8）　同上書、「学課之事」。

（9）　石橋絢彦「沼津兵学校沿革（八）」（『同方会誌』48号、1919年）48頁。

（10）　同上書、48頁。

（11）　『徳川家兵学校掟書』、「学課之事」。

（12）　『仏蘭西歩兵程式　教練之部　巻一・二』（沼津学校、1870年）。沼津市明治史料館蔵。

（13）　石橋「沼津兵学校沿革（八）」48頁。

（14）　沼津市明治史料館編『図説　沼津兵学校』（沼津市明治史料館、2009年）88頁。

（15）　田辺良輔『仏蘭西陸軍伝習　新兵体術』（養素亭蔵版、1868年）。

（16）　石橋「沼津兵学校沿革（八）」47頁。

（17）　沼津市明治史料館『図説　沼津兵学校』88頁。

（18）　田辺良輔『喇叭符号』（田辺氏、刊年不記）。なお同書は、山口常光『日本ラッパ史』（私家版、1972年）において復刻されている。

（19）　「砲兵歩兵編制式」。茨城県立歴史館所蔵。

（20）　『官許　野戦要務』（沼津学校、1865年）。沼津市明治史料館蔵。

（21）　『徳川家兵学校掟書』、「学課之事」。

（22）　武田楠雄『維新と科学』（岩波書店、1972年）200～201頁。

（23）　日蘭学会編『洋学史事典』（雄松堂、1984年）598頁。

（24）　樋口『沼津兵学校の研究』422頁。

（25）　荒木『日本英語学志』219～220頁および、「沼津版の『徳川氏改印』について」（『沼津市明治史料館通信』第48号、1997年）1～2頁。

（26）　藤田豊「蘭学・英学物理書接点―理学初歩」（『英学史研究』第17号、1984年）24～25頁。

（27）　戸塚「渡部温略伝―初期一英学者の歩んだ道」36頁。

（28）　松崎実「通俗伊蘇普物語解題」8頁。

（29）　大野『沼津兵学校と其人材』69頁。

（30）　沼津市明治史料館『沼津兵学校』11頁。

（31）　中山久四郎『世界印刷通史　日本篇』（三秀舎、1930年）409頁。

（32）　牧治三郎『京橋の印刷史』（東京都印刷工業組合京橋支部五十周年記念事業委員会、1972

年）9頁。

（33）戸塚「渡部温略伝―初期一英学者の歩んだ道」43頁。

（34）「英蘭会話篇訳語序」（『英蘭会話訳語』渡部氏蔵梓、1868年）1丁。

（35）荒木『日本英語学書志』245頁。

（36）明治文化資料叢書刊行会編『明治文化資料叢書　第7巻　書目篇』（風間書房、1972年）27頁。

（37）第一版の刊記みると、「EDITED BY WATANABE & CO./YED./ON THE THIRD YEAR OF KAI-OU.」となっている。

（38）原書では、下記のように蘭語と英語を併記する形で、相互に意味がわかるようにしてある。ここでは冒頭の5点を例示するとともに、参考として『英蘭会話訳語』収載の翻訳を付す。

Goeden dag	Good day	コンニチハ
Goeden avond	Good evening	コンバンハ
Goeden morgen	Good morning	オハヤウ
Geef mij	Give me	クダサイ
Leen mij	Lend me	オカシナサイ

（39）飯田「明治初期の沼津の英学」98頁。

（40）渡辺一郎訳『陸軍士官必携』（山城屋佐兵衛、1869年）巻末附録。

（41）小幡篤四郎訳『生産道案内　上』（尚古堂、1870年）5丁。

（42）石上東藁「明治初期の沼津版について」31頁。

（43）「『英国史略』他開板につき願書」（沼津市史編さん委員会編『沼津市史　資料編　近代1』沼津市、1997年）69～70頁。

（44）片桐「幕末明治の洋学者・渡部温（一郎）覚え書（1）」67頁。

（45）初版の刊記は「YEDO. THE 2nd YEAR OF KEI-OU」とあり、題箋も縦書きの「コル子ル氏著　地学初歩」となっていて、巻末に「無尽蔵之印」が朱印で押されている。

（46）明治文化資料刊行会編『明治文化資料叢書第7巻　書目篇』19頁。

（47）同右、27頁。

（48）戸塚「渡辺温略伝―初期一英学者の歩んだ道」40頁。

（49）明治文化資料叢書編『明治文化資料叢書　第7巻　書目篇』13頁。

（50）「和歌山県史　前記五　和歌山藩史　制度・兵制」。国立公文書館所蔵。

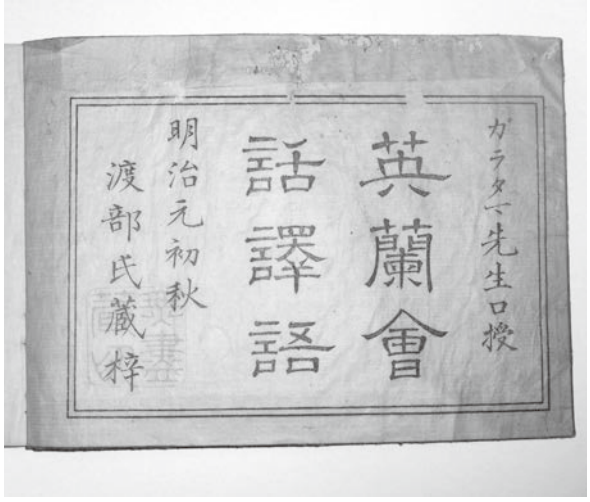

図１　『英蘭会話訳語』（明治元年刊）の見返し

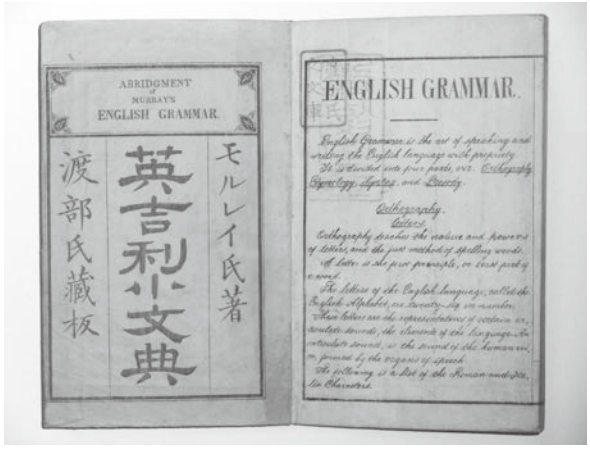

図２　『英吉利小文典』（無刊記）の見返し

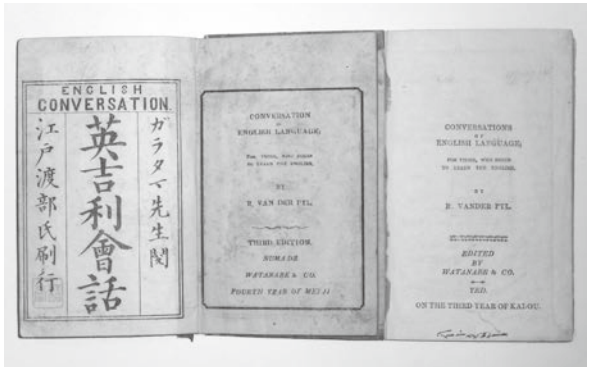

図３　『英吉利会話篇』第三版（明治４年刊）の見返しと扉：左、江戸版（慶応３年刊）の扉：右

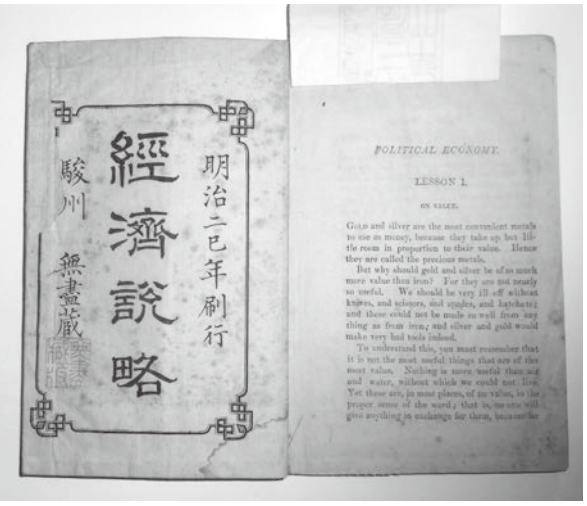

図４　『経済説略』（明治２年刊）の見返し
（日本大学国際関係学部図書館所蔵）

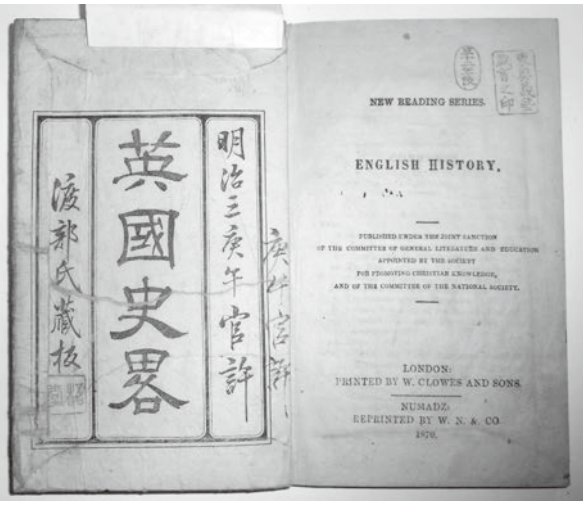

図５　『英国史略』（明治３年刊）の見返しと扉
（日本大学国際関係学部図書館所蔵）

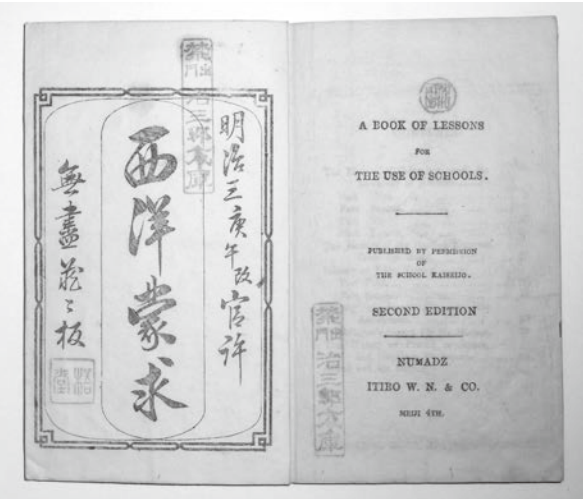

図６　『西洋蒙求』（明治４年刊）の見返しと扉

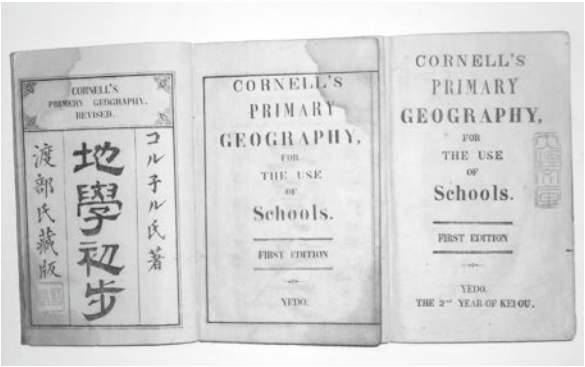

図７　『地学初歩』（明治版）の見返しと扉：左、江戸版（慶応２年刊）の扉：右

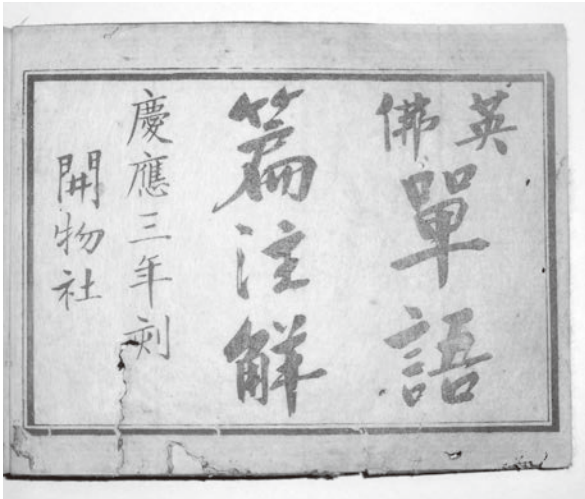

図８　『英仏単語篇注解』（明治版）の見返し

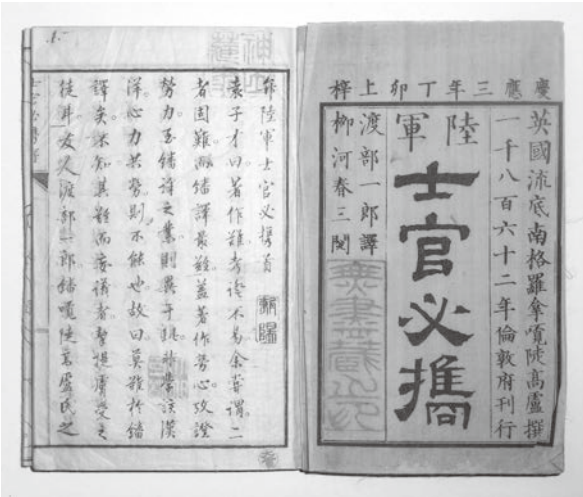

図９　『陸軍士官必携』（明治版）の見返し

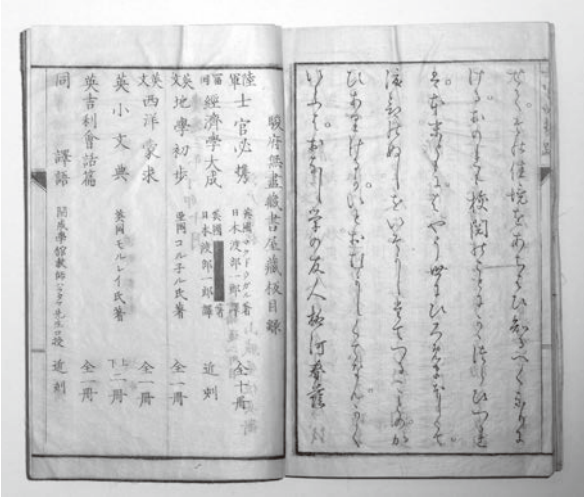

図10　『陸軍士官必携』巻末の「駿府無尽蔵書屋蔵版目録」